

土屋耕一

1930年東京麻布生まれ コピーライター

資生堂、ライトパブリシティを経て

1976年フリーランスとなる。

現在、

東京コピーライターズクラブ、及び

東京アートディレクターズクラブ会員

著書

『つつみがみつ』福音館書店

『土屋耕一のガラタ箱』誠文堂新光社

作品集『土屋耕一がつくったキャッチ

フレーズ100』等

土屋耕一回文集

軽い機敏な仔猫何匹いるか

NDC 917

昭和55年10月9日 発行

定価 2500円

著者 土屋 耕一

発行者 小川 茂男

発行所 誠文堂新光社

東京都千代田区神田錦町1丁目5番地

〒101 振替東京 7-6294

印刷 星野精版印刷KK

製本 若林製本KK

検印省略 落丁乱丁本はお取り替えします

© 1972 Koichi Tsuchiya

Printed in Japan

0095—3854

土屋耕一回文集

軽い機敏な仔猫何匹いるか

折り折りに書きためてきた回文を、ひとつにまとめてみました。

回文というのは、上から読んでも、下から読んでも同じになる文のことです。昔から「タケヤブヤケタ」が有名です。また「ダンスが済んだ」も、よく知られています。何気なく身の廻りにある語で「新聞紙」とか「田植歌」というのも、よく見ると回文です。

回文は、あくまでも上下同文ですから、たとえば「山本山」のように、漢字が視覚的に逆になっているようなものは含みません。

さて、この言葉遊びは、かなり古くから行われていて、本によると、遠く鎌倉時代の歌人の作などというものも紹介されています。お正月の宝船に添える歌「長き夜の遠の眠りのみな目覚め、波のり舟の音のよきかな」も、そういう古い時代から今にまで受けつがれてきた回文歌の名作です。

回文は、その後、短歌になり、連歌になり、俳諧になり、或いは口頭遊戯になりなどして、さ

さまざまな展開をみせたのですが、近頃では、まったく聞かなくなっていました。

私が、この本でお見せする回文は、そういう先人の残したものの伝承なのですが、ただ、すこし作り方を、今様に変えたところがあります。

それは仮名づかいで、とくに濁点の処理を現代表記に従ってやるところが相違と言えるでしょう。昔の表記は、言うまでもなく濁点についてはまったく自由です。たとえば「ふと逃げた鶯低う竹にとぶ」のように、これをもし今日の表記でいったら「フトニゲタ」の反対は、決して「タケニトブ」にはならないわけで、濁点は、返ったときも濁っていること、というのを、私のルールにしました。

また、古いものには「寝てふざけ教師と娼妓今朝ふて寝」のように、真ん中の部分が「キヨウシ」と「シウヨキ」になっていて拗音のつかい方にかなり乱暴な例も多く見られます。これらも出来るだけ、忠実に作ったつもりです。

ただ、なかには、ちょっと無理をした句もいくつか入ってしまいました。厳格にフルイにかけられなかったのは、私の甘さかも知れません。

この本は、三部に分かれていて、などと書くといささかおこがましいのですが、とにかく、一部と三部が散文で、一部はどちらかと言えば短い部類、二部の方に長いものを集めました。第二部は、句です。第三の部がもっとも多くの頁をとっているのは、私の作り方の、ひとつの好みの反映でしょう。

ゲラ刷りになった自分の回文に目を通しているうちに、なぜ、こんなに他愛もないものを本になどするのかという根源的な疑問が湧いてきて困りました。それはおそらく、回文が言葉遊びであることの、その遊びにつきものの無意味さから生まれる空虚感なのでしょう。

おそらく、私のあとに、こんな回文など作るひとは、もう二度と出てこないような気がするのです。

なお、遅れましたが、この本が出来上がるについては、和田誠、岩永嘉弘、お二人のお力添えがあったことを報告しなければなりません。尻の重い私ひとりでは、到底こんなまとめは不可能だったと思います。あつく感謝します。

なお、本の題にもなっている「軽い機敏な仔猫何匹いるか」は、回文についての小文を雑誌「話の特集」に書いたときにつけられた題で、その後もひきつづき使っているうちに、いつのまにか、私の回文集の標題にまでなっていました。

昭和四十六年夏

土屋耕一

(柚子湯)

	1							
--	---	--	--	--	--	--	--	--

求む友 モトムトモ

反戦派 ハンゼンハ

若い河 ワカイカワ

暇に麻痺 ヒマニマヒ

怒る会 イカルカイ

キスが好き キスガスキ

三厘差 サンリンサ

誰かが彼だ グレカガカレダ

記者の屋敷
キシヤノヤシキ

死ぬな船主
シヌナフナヌシ

真剣剣士
シンケンケンシ

執事の実子
シツシノジツシ

機敏万引
キビンマンビキ

喫茶さつき
キッササツキ

陣地に椿事
ジンチニチンジ

韋駄天手代
イダテンテダイ

ウラナイナラウ
占い習う

カズワツメカ
数は僅か

サギナクナギサ
驚啼く渚

シナモノモナシ
品物も無し

キズウズキ
傷うずき

キンセイセンキ
近世戦記

アマルマニア
動物狂

ヨウカンカウヨ
羊羹買う夜

床トコの間マの琴コト

原罪ゲンザイザン懺悔ゲンゲ

皆ミナはハお花見オハナミ

早稻ワセノセワの世話

吉葉ヨシバの場所バシヨ

詩歌シカワカインを解し

城シロの狼煙ノノロシ

間カシイッパツイン一髮引火カ

陸路を六里

水は上澄み

飯を惜しめ

強い相四つ

反省的停戦派

キネマの招き

鯛焼焼いた

ビタミン三度

噓ウツつきキの吉相ノキツウ

キンキググの軍旗ノグンキ

串クシかつカ懐ツナツしくカシク

煮ニろロ釜カマでデママカカロロニ

日ヒ延ノべベの日ノヒ

岸キシはハけケわワしシきキ

リリヤヤ王オオの大槍ノオオヤリ

うウろロたタえエたタろロうウ

サンザンナナンザンサ
散々な難産さ

ヨメガヒガメヨ
嫁がひが目よ

カンケイナイケンカ
関係ない喧嘩

トオクテタオト
戸をたてた音

ポルノのルポ
ポルノのルポ

ニクツゴツタニ
煮たつゴツタ煮

クカラアラクカ
宝あらかた

カンザサニサザンカ
寒笹に山茶花

腐クサツつても鉄テツ柵サク

うウまマくク匿カクうマウ

開カイ拓タク地チ区ク大ダイ火カ

信シ濃チ路ジのノ梨ナシ

宵ヨ宮ミヤのノ闇ヤミ夜ヨ

食シヨク費ヒをヲ引ヒクくク由ヨシ

養ヨウ豚トシ千セン頭トウ余ヨ

残ザン念ネン捻ネン挫ザ